

物語という観点から読み直すフェリックス・ガタリ思想

香川 祐葵*

Rereading Félix Guattari's Thoughts from the Perspective of Narrative

KAGAWA Yuki

論文要旨

20世紀末以降、「物語」の重要性が高まっている。「ナラティブ・ターン」と呼ばれる、この認識論的・方法論的転回は、科学的・客観的エビデンスから逃れる主観的な視点の重要性を見直す動きであり、現在では多くの分野でよく知られている。しかし、どの分野でもほとんど知られていないが、20世紀の思想家フェリックス・ガタリも、1980年代以降、「物語」の重要性を強調していた。この時期のガタリの「物語」重視は、時代的にも、後に「ナラティブ・ターン」と呼ばれる動きの一環として見るのが可能ではないかと筆者は考える。本稿の目的は、ガタリ思想を「物語」という観点から見直し、彼の思想を「ナラティブ・ターン」との関係から位置づけることである。

キーワード ガタリ、物語、ナラティブ・ターン、主観性、メタモデル化

Abstract

Since the end of the 20th century, the importance of “narrative” has increased. This epistemological and methodological turn is called the “Narrative Turn.” This term refers to a movement to rethink the importance of subjective perspectives that escape scientific and objective evidence, and it has become well-known in many fields. Although little known, Félix Guattari also emphasized the importance of “narrative,” starting in the 1980s. I believe that this view of Guattari can be seen as part of the phenomenon of the “narrative turn.” The purpose of this paper is to review Guattari's thoughts from a “narrative” perspective and to situate his thoughts in relation to the “Narrative Turn.”

Keywords: Guattari, narrative, Narrative Turn, subjectivity, metamodelization

* 大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程；shikakawayouki@yahoo.co.jp

1. はじめに

21世紀に入って、人文系の諸学問分野や医療の分野を中心に、「物語」あるいは「ナラティブ」の重要性が増してきている。「ナラティブ・ターン」と呼ばれる、こうした物語を重視する認識論的・方法論的転回は、簡単に言えば、科学的・客観的エビデンス重視の傾向に対して、そこから逃れる主観的な視点の重要性を見直そうとする動きと言うことができるだろう。それは例えば、江口重幸が主著『病は物語である』のなかで繰り返し指摘する、「病気」に関する二つの区別を参照すると分かりやすい。江口は、臨床人類学の「疾患 (disease)」と「病い (illness)」の区分を参照しながら、「疾患」は、医療の専門家が病気を「外的」に再構成するもので、生物医学のリニアな思考過程を経て単一の客観的な医学診断枠に収斂するものであるのに対し、「病い」は、患者や家族といった当事者が「内側」から経験するもので、多様な塊状の語りを経て病いの独自の主観的経験に迫る人間科学的な方法論であると述べ(江口 2019:131-132)、その質的な違いに注目する。つまり、科学的な記述ではすくい取れない内的・主観的経験は、物語という形で現れるということである。これを踏まえれば、ナラティブ・ターンは、私たちが生きていくなかで欠くことのできないであろう、内的・主観的経験をいかに学問領域に組み直せるかという試みと見ることができるだろう。

さて、こうした動きは20世紀末頃から少しずつ登場しはじめるが、今や一部の分野では“あたり前”の考え方になってきている。しかし、おそらくどの分野においてもほとんど知られていないが、20世紀フランスの思想家、精神療法家、政治活動家である、フェリックス・ガタリ (Pierre-Félix Guattari, 1930-1992) も、こうした物語の重要性に早くから気づいた人物のひとりであった。彼は、思想家としては、哲学者ジル・ドゥルーズ (Gilles Deleuze, 1925-1995) との共著、なかでも『アンチ・オイディプス』と『千のプラトー』によってその名を世界的に知られる人物である。また、精神療法家としては、精神科医ジャン・ウリ (Jean Oury, 1924-2014) と共に、フランスの反精神医学の流れを汲む精神病院ラ・ボルド病院で、「制度論的精神療法／制度を使った精神療法 (psycho-thérapie institutionnelle)」⁽¹⁾と呼ばれる実験的な精神療法を行ったことで有名である。さらに、若い頃からフランスの政治運

動を数多く牽引してきた活動家でもあり、政治活動家としても有名な『帝国』の著者アントニオ・ネグリ（Antonio Negri, 1933 -）とは、共著を書くなど深い親交があった。

このように三つの顔を持つガタリは、それぞれの分野において、その名前だけはよく知られているものの、彼独自の思想や活動については、単独で取り上げられる機会があまり多くない。その背景には、昨今の学問の専門化のなかで、いくつもの学問分野を横断するガタリの全体像を概観することが難しいという方法的問題がある。また、彼のテキストに散見される独自のジャーゴンが、読解の難易度を上げていることも、彼の思想が正面から扱われにくい理由の一つであろう。さらに、ガタリは自らの著作のなかで彼の分析の具体的な方法を（いくつかの症例分析を除いて）ほとんど示していないということも、研究を困難にしている。とはいえ、2000年以降、国内外でガタリ思想や活動は見直されつつあり、海外ではステファヌ・ナドーやギャリー・ジェノスコなど、国内では杉村昌昭や三脇康夫など数人の研究者らによってガタリの文献整理・翻訳が行われてきたことで研究環境が整ってきた。近年ではガタリ単独の思想や活動に焦点を当てた研究書も少しずつ増えてきている。

しかし、主に1980年代以降、ガタリが「物語」を一つの注目すべきテーマと考え、その単著において重要な役割を与えていたことは、これまでほとんど指摘されてこなかった。ガタリにおける「物語」の重要性が顧みられて来なかった理由は、この言葉の登場回数が非常に少ないため、そもそも注目されにくいためだと考えられる。しかし、晩年の「物語」の機能についての説明は、抽象的な説明しか与えられないがガタリの方法の要である「メタモデル化（*métamodélisation*）」を説明するキーワードだと筆者は考える。また、この「物語」というテーマを介することによって、ガタリの方法を、同時期に台頭しはじめた「ナラティブ・ターン」と関係づけることも可能になるだろう。現在、具体的な研究方法が明示されているナラティブ研究とガタリの「メタモデル化」を対比できれば、これまで秘儀的とも言われたガタリの方法の具体的な方法の解明にも繋がるだろう。本稿の目的は、ガタリ思想を物語という観点から見直し、彼の思想を「ナラティブ・ターン」との関係から位置づけること、および、近年のナラティブ研究がガタリの方法を明らかにする上で具体的な参照項になり得ることを示すことである。

2. 反精神医学とナラティヴ・ターン

ガタリは、先述の通り、反精神医学の流れを汲む精神病院で働いていた。近年、反精神医学や、彼の勤務したラ・ボルド病院は、ナラティヴ・ターンとの接点が指摘されることがあるため、まずはこれらとの関係から見ていこう。

反精神医学は、“精神病など存在せず、特定の人々に社会が「精神病」というレッテルを貼っているのだ”という強い主張をすることから、しばしば非科学的で大げさな見方として、現在ではあまり顧みられなくなってきている (ref.阿部 2010)。しかし、冒頭でも引いた本のなかで江口は、反精神医学の試みは、精神病の否定を行おうとしたのではなく、患者の主観的な経験をいかに理解するかという現象学的な問いから出てきた動きだと見ている (江口 2019:11)。反精神医学は、当時の欧米の精神病院の抑圧的で劣悪な環境に対する改革、それまでの精神医学の伝統的枠組みへの反論、さらに学生運動の隆盛などの社会状況といった一連の流れのなかで発生してきたものであろう (ref.阿部 2010)。しかし、その根幹には、患者の立場から病いの経験を見たとき、精神医療の現場はどうあるべきかという問い、さらにいえば、マイノリティーの立場から世のなかを見たとき、社会はどうあるべきかという問いがあると言っているだろう。

ガタリの活動していたラ・ボルド病院は、院長のウリがこの病院を設立する前に勤めていたサン・タルバン病院の影響を色濃く受け継いでいる。サン・タルバン病院は、スペイン生まれの医師フランソワ・トスケル (François Tosquelles, 1912-1994) によって、制度論的精神療法が発明された場所である。トスケルが来てすぐの頃のサン・タルバン病院は、当時のヨーロッパの精神病院を象徴するように、不衛生と人口過剰にあえいでおり、看護する者もされる者も慢性的な病的状態に陥っていた (杉村 2001:165)。彼はこの状況を打開するため、医療体制の根本的な見直しを図り、患者を閉じ込める鉄格子の撤廃や院内の権力構造の転倒に加え、患者自身も自らの権利を行使できるようにし、病院全体が永続的に自己組織される仕組みを編成した (杉村 2001:166)。このとき作られた、医師と患者が一緒になって病院のあり方を改革し続ける方法が後に制度論的精神療法と呼ばれる。ウリは、このサ

ン・タルバン病院での研修の後、この方法を受け継いでラ・ボルド病院を設立し、後にそこにガタリも加わることとなる（三脇ほか 2008:11-12）。

制度論的精神療法では、このように患者自身の権利を重視し、彼らが自ら病院のあり方を決めていける場づくりを行っている。こうした医療制度それ自体が患者の経験に徹底的に寄り添う空気感のなかで、ガタリが患者の内的・主観的経験の現れとしての物語の重要性に気づいていったのは必然と言えるかもしれない。実際、2000年以降、こうしたラ・ボルド病院の試みは、ナラティヴ・ターンの代表的な分析方法ともいえる「オープンダイアログ（Open Dialogue）」との類似が指摘されてきている。日本におけるオープンダイアログの第一人者である斎藤環は『オープンダイアログとは何か』のなかで、反精神医学の文脈で有名なデビッド・クーパー（David Cooper, 1931-1986）や R・D・レイン（Ronald David Laing, 1927-1989）、ガタリらの制度論的精神療法が、オープンダイアログに近い治療実践だと述べている（斎藤 2015:15）。また、最近では、松本卓也が『オープンダイアログ——思想と哲学』のなかで、主に空間配置と主体の観点から、ラ・ボルド病院およびガタリの思想とオープンダイアログの類似を指摘している（松本 2022:114-116）。こうしたオープンダイアログとの比較に関しては、後でもう少し詳しく取り上げよう。ともあれ、ここでは患者の内的・主観的経験の重視という点において、反精神医学とナラティヴ・ターンとの間に類似があることを指摘することとどめて、次はいよいよガタリにおける物語の重要性について見ていこう。

3. ガタリにおける物語の重要性

ガタリが明示的に物語に注目するようになるのは、おおよそ 1980 年代からである。彼が物語について述べる箇所はいくつかあるが、特にまとまった記述がある『三つのエコロジー』（1989）と『カオスモーズ』（1992）をここでは取り上げる。

3.1 『三つのエコロジー』

『三つのエコロジー』では、「narratif」や「récit」などのいずれも「物語」

と訳せる語彙が数は少ないものの何度か登場する。そこでは物語に関するいくつかの指摘があるが、特筆すべきはガタリが物語を彼独自の主体概念である「主観性／主体性 (subjectivité)」⁽²⁾との観点から重視している点である。ガタリは哲学的理論においても精神療法や政治運動といった実践においても、常に“新しいものの見方・感じ方を作ること”を重視していた。これは特に 80 年代頃には“新しい主観性の生産”という言葉に要約されるようになるが、彼はこのテーマにあらゆる問題解決の突破口を見出していたと考えられる。

ここで言う「主観性 (subjectivité)」は、従来の「主体 (sujet)」概念を批判するためにガタリが導入した用語で、主体のように必ずしも個人レベルでの生産が前提とされているものではない。主観性とは、その構成要素が集団、個人、個人未満といったさまざまなレベルで離散集合することで動的に形成される私たちの考え方・感じ方のこと指す。ここには、主体のあり方に対するガタリ独自の転回がある。主観性については、特に 80 年代以降のガタリの文献で幾度となく論じられているので、そのすべては紹介できないが、この点について端的に述べたガタリの対談の一部のみ、少し長いがここで引用しておこう。

私は主観性はつねに集合的動的編成の結果であるという考えから出発するのです。集合的動的編成は個人の多数多様性だけでなく、テクノロジー的・経済的・機械的なファクターの多数多様性、前個人的といってもよい感覚的ファクターの多数多様性といったものをもたらします。個人というのは、私にとって、ある型の文化や社会的実践と結びついた動的編成の一特殊ケースにすぎないものです。私はまずもって、文化やコミュニケーションを諸個人のあいだの相互作用の結果であると考えてという類の還元主義を拒絶します。最初から個人的横断的な主観性の構成があるのです。それはあなたが言葉に関して考えてみれば納得されるでしょう。あなたは自分がしゃべるにつれて徐々に言葉を発明していくというわけではありませんよね。言葉はあなたのなかに住み着いて、あなたが組み込まれているエコロジー的・動物行動学的な社会的範囲に共存しているのです。主体化の全プロセスについても同じことが言えます。

(Guattari 2013:150 (=ガタリ 201:137-138))

ガタリの主観性という概念には、一般に間主観性について言われるような個人の「あいだ」にある空気感を先に想定し、そこから個人や集団に成っていくと考える、近代的主体に反する転回があると言えよう。ラ・ボルド病院の例で考えれば、主観性とは、患者、医師、医療スタッフ、病院の施設およびその配置、病院が採用する制度など、病院の構成要素すべてによって集合的に形成される、病院の雰囲気のようなものといってもよいだろう。ほかに性的マイノリティーの例で考えれば、主観性とは、文化、風習、身体的特徴、制度、メディアなど、社会のさまざまな要素によって、集団、個人、個人未満のレベルで形作られる、「性」というテーマを取り巻く考え方・感じ方のことと言える。そのため、“新しい主観性を生産する”ということは、患者やマイノリティーといった当事者に限らず、私たちみんなの価値観が多様な次元で変化するような事態を指している。

ガタリはこの新しい主観性の生産を自らの思想と活動の軸に据えて、あらゆる物事の変化のプロセスを観察するように分析を行っていた。しかし、この主観性の生産過程というのは目に見えて分かるものではなく、たとえ感覚的に発見する瞬間があったとしても、それが何らかの形で表象されるときには必ず迂回路を通らなければならない。その迂回路として想定されたのが物語である。そして、これを彼は「メタモデル化」と言い換える。

純然たる創造的自己参照は通常理解範囲を超えている。つまり、そうした創造的自己参照を表象しようとしても、結局それを何らかの基準的な神話や物語によって覆い隠したり、変装させたり、ゆがめたり、やりすぎしたりすることしかできない——これが私がメタモデル化と呼ぶところのものにほかならない。発生期状態にある創造的な主観化の根源地に到達するには、迂回路的形態のもとにくりひろげられる幻想経済という回り道を通っていくしかない。

(ガタリ 1989:54 (=ガタリ 2008:53))

ガタリは、さまざまな要素の動的編成によって生成する主観性という、主体に関する転回を想定した上で、その微視的な動きを現実の治療の場などで言説的に把握するには、物語という形を取ったそれらを捉えるしかない

と考えている。これは、江口の論に関して言われる、患者の内的・主観的経験は物語として現れるという発想と同様のものと考えてよいだろう。ここで、ガタリはこの物語のことをメタモデル化という独有用語で言い換えている。このメタモデルは、当然のことながらモデルに対置されるのだが、ここで彼が想定するモデルとは精神分析のモデルや科学的エビデンスモデルなど、少なくともある時期のある社会において「普遍的」だと考えられている参照モデルのことである⁽³⁾。これに対してガタリは、そういった従来モデルから一度距離を取り、その都度モデル作り直すこと、すなわち、その時々で語り直すことを勧めている。そして、このメタモデル化こそが、彼が「スキゾ分析 (schizoanalyse)」と名づけた自らの分析の方法なのである。以下の引用は、物語について直接言及したものではないが、『精神の管理社会をどう超えるか?』のなかで、ガタリがこのメタモデル化をよく説明している箇所である。

スキゾ分析をすることは、代替的なモデル化ではありません。それはメタモデル化です。それは、あなたが今いる場所がどのようにしてできたのかを理解しようとするものです。「あなたにとってのモデルはなんですか?」うまく機能していない? どうだか分かりませんが、それなら一緒にやってみますか。他のモデルに接ぎ木ができるかどうか、確かめなければなりません。それはおそらく良く悪くもなるでしょう。いずれ分かることでしょう。標準的なモデルを据えることは問題ではないのです。そして、ここにおいて本当の基準は、メタモデル化それ自体が自己モデル化に、あるいは自己形成に変わるとき、まさに訪れるでしょう。(Guattari 1996:133 (=ガタリ 2000:45))

ガタリの思想や活動には、“新しい主観性の生産”という大きな課題があるが、この主観性の生産は微視的で感覚的にしか把握できない。そのため、現実の治療や政治運動の場で分析していくには、物語という迂回路を取ったメタモデル化が必要なのである。このメタモデル化、すなわち“物語を作り直すこと”によって、他者性や社会性を含みこんだ自己とでも言い得る主観性は、新しく生産される可能性に開かれるのである。

3.2 『カオスマーズ』

さて、こうしてガタリの分析に物語というテーマが意識的に現れた『三つのエコロジー』から三年後、最後の著作となる『カオスマーズ』のなかで、ガタリはさらに詳しく物語の機能について言及する。第三章「スキズ分析によるメタモデル化」では、以下のように説明される。

物語の基本的機能は、もはや合理的説明を生み出すことではなく、強度的記憶の残存と出来事の存立性を支える複合的リトルネロの発生を促進する点に求められるようになるのです。神話や宗教や幻想など、さまざまな物語を介在させないかぎり、実存の機能が言説に到達することはありません。(Guattari 1992:89 (=ガタリ 2004:100))

先ほど述べたように、主観性とはさまざまな要素の動的編成のなかで、集団、個人、個人未満の「何か」にその都度生成するものだが、「リトルネロ (ritournelle)」とはこの生成のプロセスをさらに細かく分析するときには彼が使う造語である。さまざまな要素の動的編成というのは、諸要素が繰り返し何らかの配置を取ることで実存的なまとまりを成し、名指せるような「何か」に生成するプロセスのことである⁽⁴⁾。リトルネロとは、この実存的なまとまりを生成する諸要素の“繰り返し”である。リトルネロに導かれて主観性はあれやこれやの「何か」に成るのだが、物語にはこの働きを助ける機能があるらしい。

ここでも、ガタリの主体に関する転回が効いてきている。すでに見てきた江口の論をもとにナラティブ・ターンを見てみると、物語の重要性が強調されてきたのは、科学的エビデンスに回収されない内的・主観的経験をすくい出すためであった。ここで物語として語られる体験は、通常なら「ある個人が持ち合わせている自分の体験を言葉にする」と考えられるはずである。しかし、ガタリの主体に関する転回を踏まえると、私たちが物語によって表現できたと思っている「私の経験」は、むしろ物語という支柱があることで「私の経験」として実存化できるようになるということになる。つまり、家族や友達、恋人との関係、住んでいる地域、馴染んできた風習など、その人をこ

れまで形作ってきた諸要素が、神話、宗教、幻想、あるいは社会的にプロトタイプ化されたストーリーなどの物語を支えにすることで、誰かに語れるような「私の経験」として生成するということである。おそらく、物語という形式を支えにすることで、主観性を構成するさまざまな要素が整理され、実存的なまとまりを生成することが可能になるのだろう。

実は、ここで参照する江口の理論は、それ自体がこのガタリの考えに近い発想を含んでいる。江口の場合は、さすがに個人以前の審級が、集団や個人や個人未満の「何か」に成るといほど挑戦的な主張はしない。しかし、患者の語りのなかには、その人の背景にある文化が深く練り込まれており、この文化的な側面にアプローチしなければ、その語りを聞き取ることができないということが『病は物語である』のなかで繰り返し述べられ、この本の中心テーマとなっている。具体的には、日本で精神科の臨床医をしてきた江口がそれまで取り組んできた事例を参照しながら、統合失調症の患者の語りを理解する上で、日本の呪術的・宗教的背景の参照が不可欠であったことなどが語られている。ここで言う文化は、ガタリのいう主観性の動的編成の背後にある、彼が「エコロジー的」とも形容する諸要素と同義と考えてもよいだろう。

このように文化と物語の関係を考えると、個人の語りという以外にも、民話の伝承のような集団の語り、一つの物語のなかに含まれる別の物語的要素など、さまざまな物語があることに気づかされる。そして、ガタリの主観性という観点から見れば、個人の枠に必ずしも縛られない多数多様な物語が、さまざまなレベルの主観化に関わっているといことができるだろう。

『三つのエコロジー』の説明で、すでにガタリの分析、すなわち「スキゾ分析」の方法がメタモデル化であることを確認した。また、このメタモデル化は“物語を作り直すこと”と言い換え可能であった。『カオスモーズ』においては、この物語を作り直すことの重要性がより強調される。以下は、ガタリの物語に関する考えが最もよく現れている箇所であるため、少し長めに引用する。

スキゾ的還元というものは、現象学によるすべての形相的還元よりも、はるかに遠い地点を目指しているのです。つまり物語を回復させ、妄想であっても

かまわないから、とにかく人為性のなかで実存的な物語性と他者性を立て直す非シニフィアンのリトルネロと出会う地点に導いてくれるのが、ほかならぬスキゾの還元なのです。精神分析は精神病の他者性を、ほぼ完全にとりにがした（同一化について固定的な概念形成をおこなったのみならず、強度的生成を思考する力を欠いていたというのが、その主たる原因です）。現象学のほうは、精神病について最良の記述をしたにもかかわらず、精神病をつうじて、物語性のモデル化が持つ創造的な役割を明らかにすることができなかつた。ところが、幻想、神話、小説など、物語性のモデル化こそ、さまざまなリトルネロが持つ実存的機能をすくいあげるために必要不可欠な受け皿なのです……。 (Guattari 1992:93 (=ガタリ 2004:105))

ここでもガタリは、物語性のモデル化、すなわち物語を作り直すことが、リトルネロの実存化の働きを助ける役割を担うと述べ、同時にスキゾ分析の方法と考えている。ここで彼は、精神分析と現象学を引きあいに出す。精神分析に関しては、この引用の少し前に、主観性の生産を豊かにし得たフロイト (Sigmund Freud, 1856-1939) のモデル化が、家族主義的で普遍的な概念形成と解釈実践のステレオタイプ化に陥ったこと、またフロイトに言語学的記号学を越える余力がなかったことで、早々に限界に達したとして批判されている (Guattari 1992:92 (=ガタリ 2004:103))。このことを踏まえると、精神分析に対する主な批判の論点は、物語モデルの普遍化と、ガタリの主観性のような強度的生成、すなわち個人以前の審級における諸要素の動的編成が考慮に入れられていない精神分析の主体概念にあると考えられる。現象学に関しては、精神分析よりは肯定的な評価を与えられているが、現象学の姿勢 (形相的還元) とガタリ自身の分析の姿勢 (スキゾ的還元) を比較し、現象学が物語性のモデル化の重要性に気づけなかつた点を批判している。しかし、こうしたガタリの見立ては、はたして妥当であろうか。

4. ガタリとナラティヴ・ターン

4.1 晩年のガタリとナラティヴ・ターン

ここで、改めてナラティヴ・ターンについて考えてみる必要がある。日本のナラティヴ研究の第一人者である、やまだようこは、ナラティヴ・ターンのはじまりを1990年代としている(やまだ 2006:436-437)。『カオスモーズ』の出版は1992年だが、この本がガタリの友人の精神分析家ダニエル・シヴァドン (Danielle Sivadon, 1937-2017) によって丁寧に校正されたことを考えると (Dosse 2007:461 (=ドス 2009:401))、彼がこれを書きはじめたのはもう少し前だろう (おそらく1990-1991年頃だろう)。つまり、ナラティヴ・ターンの登場と同時期に、さきほどの記述が書かれている。

やまだは、ナラティヴに関係する研究の動向を、四つの時期に分けて説明する(やまだ 2006:437)。第一期は19世紀末から1950年までで、先ほどのガタリの批判で念頭に置かれているであろう、フロイトやフッサール (Edmund Gustav Albrecht Husserl, 1859-1938) の理論など。第二期は1950年から1980年までで、これまたガタリがたびたび批判するラカン (Jacques-Marie-Émile Lacan, 1901-1981) やオースティン (John Langshaw Austin, 1911-1960) の理論など。それに続く第三期は1980年から1990年までで、リクール (Paul Ricoeur, 1913-2005) やブルーナー (Jerome Seymour Bruner, 1915-2016) の理論、エスノメソドロジーなど。そして、1990年以降の第四期からが、上記の時代の理論に影響されつつ新しい局面を迎えたナラティヴ・ターンとされ、ナラティヴ・セラピーやナラティヴ心理学などが挙げられている。おそらく、ここにオープンダイアログも含めてよいだろう。

やまだはナラティヴ・ターンを一つの転換点と捉え、それ以降のナラティヴ研究の特徴をいくつか挙げていくのだが、そのなかには以下のようなものがある。例えば、物語の生成的性質。やまだは、物語が生成的なのは、物語は語り手や書き手だけでなく、聞き手や読み手も意味生成の共同行為に参画するからだと言う(やまだ 2006:441)。また、こうした開かれた物語であることによって、多様な物語の同時共存が可能であり、支配的な物語に対して「もう一つの物語」「異なる物語」が生まれる土壌があるという特徴もある(やまだ 2006:441)。さらに、彼女がナラティヴ的世界観と述べるもの

には、旧来の「自己」「個人」「私」の解体があり、「独特の「私」個人と信じられていたものが、いかに深く「他者」や「文化・社会」とむすびについているかを発見したことが、ナラティブを中心とした質的心理学の世界観と方法論の変革」（やまだ 2006:447）と述べられている。

さて、こうして見ると、ガタリが精神分析と現象学に足りないと考えた点、すなわち、物語モデルの普遍化をしないこと、ガタリの主観性のように強度の生成が考慮に入れられた主体のあり方を想定すること、物語性のモデル化の創造的役割を重視することは、ナラティブ・ターン以降のそれらの学問が積極的に取り入れてきたことではないだろうか。おそらくガタリが当初批判したかったのは主に第二期までに該当する研究であろう。第三期は、時期が非常に短いことや、ガタリ自身が物語について指摘しはじめる時期なので、ここで挙げられている研究（リクール、ブルーナー、エスノメソドロジーなど）を十分に彼が認知していたかは分からない。とはいえ、ガタリが物語の観点から心理学への批判を避けたのは、物語の重要性を理解していた心理学者ダニエル・スターン（Daniel N. Stern, 1934-2012）の著作に、この時期のガタリが熱中していたことが関係しているかもしれない⁶⁾。そして、ナラティブ・ターンの正式な始まりと考えられている第四期は、1992年の『カオスマーズ』出版の直後に亡くなったガタリにとっては、ほとんど知ることができなかった時代である。そのため、ナラティブ・ターン以降の研究に彼が直接言及することはなかった。このように見ていくと、ナラティブ・ターンの前史にあたる研究は、ガタリが批判的に参照してきた研究と重なっており、その後の精神分析や現象学は、ガタリが死した後の時期から、彼がこれらに足りないと考えていた点を補うように発展してきたと言えるのではないだろうか。

4.2 ガタリとオープンダイアローグ

さて、ここでもう一度オープンダイアローグの話に戻ろう。オープンダイアローグは、臨床心理士であるヤッコ・セイックラ（Jaakko Seikkula, 1953-）によって、フィンランドではじめられた統合失調症の治療方法で、薬物治療を用いずに驚異的な回復率を達成していることから、世界的に大きな注目を集めている（ref.斎藤 2015）⁶⁾。そして先述の通り、ガタリ思想や実践

は近年このオープンダイアログとの類似が指摘されている。すでに先行研究で指摘されている点も含めて、以下にまず彼らの共通点をいくつか挙げてみよう。

- (1) 臨床実践における、患者、医師、医療スタッフの対等性。
- (2) ロシアの思想家ミハエル・バフチン (Mikhail Mikhailovich Bakhtin, 1895-1975) 由来の「ポリフォニー (polyphony)」概念の影響。
- (3) 統合失調症の治療モデル。
- (4) 治療の方針が開かれていること。
- (5) 幅広い応用可能性。

この他にも、両者ともウンベルト・マトウラーナ (Humberto Augusto Maturana Romesín, 1928-2021) とフランシスコ・バレラ (Francisco Javier Varela Garcia, 1946-2001) の「オートポイエーシス (autopoiesis)」やグレゴリー・ベイトソン (Gregory Bateson, 1904-1980) の『精神の生態学』から影響を受けていること、セイックラもガタリも 60 年代に過激派の学生だったことなど、数多くの共通点が見られるが、これらすべてを取り上げるのは難しいため、今回は上記 5 点に絞って彼らの類似を見ていこう。

まず、「臨床実践における、患者、医師、医療スタッフの対等性」についてだが、ガタリの場合、主な治療実践の場はラ・ボルド病院である。すでに制度論的精神療法のところでも述べたが、ラ・ボルド病院では患者、医師、医療スタッフが対等な立場で治療の方法や制度を一緒に決めていた。具体的には、ミーティング、新聞の発行、アトリエでの芸術創作など、さまざまな活動が行われるが、これらはクラブ活動のようなもので、立場に関係なく院内の誰でも自由に参加し、方針決定できる (ref. 多賀茂、三脇康生編 2008:9-25)。もちろん、このような活動は参加したい人が参加したいときに好きなことをすることが大前提としてあり、強制されることはない (ウリ 2005:41)。こうした活動が行われる理由は、これまでとは違う人やモノとの関係性を築くことが、患者の主観性を構成する要素の配置を変えること、すなわち新しい主観性の生産のきっかけづくりにおいて重要だからである。例えばこのことは、以下のガタリの記述からも確認できる。

ラ・ボルドでは精神病患者が院内の活動に参加し、責任も負うという刺激的

な雰囲気にはたって暮らせるように考え得るかぎりの策を講じてきましたが、それは単に意思疎通の環境を整えるだけでなく、集合的な主観化の拠点を作ることも目指していたからです。だから求められるのは患者の主観性を——精神療法の発症以前にあらかじめ存在したとおりの主観性に——作り直すことではなく、各人各様の生産へ導くことなのです。例えば精神病患者の一部に貧しい農村部の出身者がいたなら、彼らには造形芸術に親しんでもらうほか、演劇、ビデオ撮影、音楽など、それまで縁のなかった世界に挑ませる。……ここで重要なのは、新しい表現の質量に直面することばかりではなく、個人、集団、機械、そして多数多様な交流が一つになった主観化の複合体を築くことでもあるのです。実際そのような複合体は実存的身体を組みなおし、反復の袋小路から抜け出し、いわば再特異化するさまざまな可能性をもたらしてくれます。

(Guattari 1992:18-19 (=ガタリ 2004:15-16))

また、「グリーユ (la grille)」と呼ばれる、患者とスタッフが病院内の役割をローテーションで行うための制度があり、役割の固定による序列制度を作らないようにする工夫もなされていた (Genosko 2009:29 (=ジェノスコ 2018:44))。ラ・ボルド病院の場合は、上記の引用でガタリが「集合的な主観化の拠点を作る」と言っているように、この病院内が一種の特殊な空間 (しばしばユートピア的と形容される放歌的な場) として機能しており、こうした関係がある程度長期にわたって継続されることが多い。

それに対して、オープンダイアログの場合は、患者あるいは家族からの相談の電話に応じて、その都度すぐに治療チームが編成され、24 時間以内にはじめのミーティングが行われる (斎藤 2015:20)。そして、患者、親戚、医師、看護師、心理など (患者に関わる重要な人物なら誰でも参加可能) が車座になって、本人の現状や今後について対等かつオープンに対話を行うというのが基本的な治療の流れである (斎藤 2015; 松本 2022)。

医師と患者の権力関係を作らず、自由に誰もが発言できる場が形成されているという意味では、ラ・ボルド病院もオープンダイアログも非常に近い発想を持っている。ただし、ラ・ボルド病院が、病院という場を中心に患者、医師、スタッフが集まるのに対し、オープンダイアログは患者を中心に関係者が集まるという特性の違いがある。また、活動内容に関しては、オ

オープンダイアログが話すことのみ集中しているのに対し、ラ・ボルド病院では体を動かしながらのさまざまな活動があり（もちろん、こうした活動を通して集団で対話もするのだが）、ラ・ボルド病院の方が圧倒的に活動の種類が豊富である。

次に、「両者におけるバフチンのポリフォニー概念の影響」を見てみよう。ポリフォニーとは西洋音楽由来のバフチンの概念であり、ドフトエフスキー作品において、発話が主人公の主旋律になっておらず、他の登場人物の発話と対等に扱われることを指して、この言葉が使われる（斎藤 2015:190）。ガタリにおけるポリフォニーは、主観性のあり方について言われる（Guattari 1992:11-12（＝ガタリ 2004:7-8.））⁽⁷⁾。これは主観性が、そもそも個人という区分に根差したのではなく、さまざまな要素によって、その都度生成するものであり、自己の声のなかに複数の他者の声をも含みこんだようなものであることを指してポリフォニーと呼んでいるのであろう。実際、ラ・ボルド病院という「集合的な主観化の拠点」は、ポリフォニックな主観性の生産の場といえる。

これに対し、オープンダイアログでは二つのポリフォニーがあり、一つは対話の場面で複数の人々の声が、対等に共存しながら折り重なっていくという外的ポリフォニー、もう一つは「もしあの方がここにいたら、何ていったと思う？」などと質問されることで、個人の内面における関係性がポリフォニックに喚起される内的ポリフォニーである（斎藤 2015:48）。両者とも、自己の声と他者の声が対等に重なり合うという点ではおおよそ似たような構図になっている⁽⁸⁾。しかし、オープンダイアログには、外的ポリフォニーと内的ポリフォニーの二つがあることから、個人という概念が強く保持されているため、主体の見方に対してはガタリと少し違いがあると考えられる。

そして、三つ目の「両者とも統合失調症の治療モデルをもとにしている」という点。この点は先行研究において意外にも指摘がないのだが、実は重要ではないかと筆者は考えている。ガタリの分析方法が彼自身によって「スキゾ分析」と名づけられていることはすでに述べたが、この「スキゾ」とは「スキゾフレニー（schizophrénie）」すなわち、現在の日本では統合失調症と呼ばれるもののこと指している。スキゾ分析はスキゾフレニーモデルの分析法なのである。以下は、すでに引用した『カオスモーズ』の物語に関する記述

の直前の箇所である。

精神分析が神経症に対する見方をつうじて精神病を概念化したのに対し、スキゾ分析は、精神病が世界にあるときの様態に照らして、あらゆる主観化の様相を探っていきます。なにしろ精神病以上に、日常のモデル化が剥き出しになった場所は他にないのです。精神病にあらわれた「日常性の公理」は、根底的なところで非シニフィアンの実存の機能が阻害され、いかなるモデル化も不可能となったゼロの次元をあらわしているのです。神経症では、症状の物質的素材が支配的な意味作用に囲まれている。それに対して精神病では規格化した現存在 [Dasein] が世界の存立性を失うのです。(Guattari 1992:92 (=ガタリ 2004:103-104))

ガタリは、しばしばスキゾフレニーと精神病 (psychose) を同じ意味で使っており、特に『カオスマーズ』では精神病の用語が採用されている。ここで彼は、精神病患者、特にスキゾフレニーを存在論的に分析し、「実存の機能が阻害され、いかなるモデル化も不可能となったゼロの次元」を想定する。しかしこれは、ひるがえって、彼らが治癒する過程においては、モデル化が可能となり、実存が回復するということである。そしてその方法は、先に見てきたように、メタモデル化＝物語を作り直すことであり、その物語を支えにしてリトルネロが実存的まとまりを新たに生成させる。ここで“新たに生成させる”という視点は重要である。なぜなら、これまでと同じような動的編成によって、前と同じような実存的まとまりが生成すると、症状の再発の可能性が高いからである。主観性は“同じものの生産”ではなく、“新しい生産”である必要があるのだ。つまりガタリは、“新しい主観性の生産”という主体の転回についての発想をスキゾフレニーの存在論から導き出しており、この“新しい主観性の生産”のための迂回路的方法が、晩年には“物語を作り直すこと”と述べられているということである。もちろんこの物語は、すでに見てきたように、多数多様に共存するポリフォニックな物語であり、その複数の物語が主観性という生成的主体を豊かにしていると言えるだろう。ガタリがこの分析方法の着想において、なぜスキゾフレニーをモデルにしたかは、おそらく彼がはじめに診たスキゾフレニー患者R・Aの症例

の影響が大きいと思われるが、この点については本稿の範囲を越えてしまうので、ここでは扱わない⁽⁹⁾。

これに対して、オープンダイアログと統合失調症の関係は、本章の冒頭に述べた通り自明で、そもそもこの治療法自体が統合失調症の治療からはじまっている。ただし、なぜ統合失調症だったのかという点に関しては、国家政策が大きく関与しているようである。1980年代にフィンランド政府は統合失調症対策プロジェクトに乗り出すのだが、オープンダイアログはこのプロジェクトの試行錯誤の過程で生まれたものであった（斎藤2015:118）。こうした点から比較すると、スキゾ分析もオープンダイアログも、まず統合失調症の治療を目的とした環境があり、その実験的な治療過程なかで“ポリフォニックな「物語」が治療において重要”という発想に至っているという共通点がある。

四つ目の「治療の方針が開かれていること」であるが、ガタリの場合これは、普遍的な分析モデルを想定せず、状況に合わせて何度でも物語を作り直すこと＝メタモデル化という点がオープンである。対してオープンダイアログは、その名の通り患者が自由に何でも発言できること、および患者と共に治療の仕方を決めていくというスタイルが開かれたものである。両者ともに、語る内容における開かれがあると同時に、はじめから治療のプロセスがカッチリと決まっていないという方針における開かれがある。これは両者がバフチンのポリフォニー概念を各自の方法のなかに織り込んでいることが関係しているが、そもそも統合失調症を治療する上で、この“ポリフォニックで開かれた”という点が重要なかもしれない。

最後に、五つ目の「幅広い応用可能性」である。ガタリ自身が、思想家、精神療法家、政治活動家という三つの大きなフィールドを持っているように、ガタリは思想や活動はそもそも臨床的な治療のみを対象をしているものではない。彼はあらゆる物事がさまざまに繋がりが得るという世界感を持ち（これはしばしば「機械状 (machinique)」という言葉で表現される）、そうしたさまざまな要素の繋がりが新しい主観性を生産すると考えていた。そのため、ガタリは思想の応用可能性はかなり広いと考えられる。実際、ドゥルーズとの共著も含めれば、哲学、精神医療、政治、人類学、教育、建築、芸術、メディアなど、幅広い分野でガタリは思想は受容されてきた。

これに対しオープンダイアログは、セICKラらの実践自体が治療の

対象を統合失調症に限定しておらず、なかには教育現場での応用もあるようだ（斎藤 2015:19）。また、近年では職場でのオープンダイアログの活用を勧める動向などもあり、今後さらに応用の場を広げていきそうである。この応用可能性の広さに関しては、ガタリの分析にしても、オープンダイアログにしても、現状では明確に比較できるほどの材料がないように思われるが、少なくとも両者の分析における「開かれている」という特徴が、こうした応用の広さに通じるものだと考えられる。

さて、ここまで五つの観点からガタリの思想や実践とオープンダイアログの異同を見比べてきた。両者は、統合失調症の治療を発想の起点としていることと、バフチンのポリフォニー概念を参照していることを中心に、現場の成員の対等性、開かれた治療方針、応用の幅広さなどが共通点として挙げられた。このように共通点が多い一方で、細かな点で違いも見られた。それは主に、本稿においてガタリの思想における主体に対する見方の転回と呼んだ点で、オープンダイアログは個人に根差した主体という発想を（少なくとも形式上は）保持するのに対し、ガタリの場合は徹底してこれを解体し、生成的主体を導入する。しかし、両者ともに“ポリフォニックな「物語」”あるいは“共存する複数の「物語」”という観点から、改めて集団で主体を立て直していくという根本的な考え方は同じなのではないかと考えられる。つまり、ガタリの「状況に合わせて物語を作り直すことで、新しい主観性を作る」というメタモデル化と同じような方針を、オープンダイアログも持っていると考えられる。ガタリの方法とオープンダイアログの比較は本稿では表面的な指摘に留まってしまったが、具体的にスキゾ分析がどのような方法で実践を行っていたかを紐解く上で、オープンダイアログは貴重な参照項になるのではないだろうか。今回は類似点を主に並べたが、主体に対する見方の違いを中心に、今後はその違いを細部にわたって明確にすることで、スキゾ分析およびガタリの思想の特異性を見出せるのではないかと考えている。

5. おわりに

最後に、これまでの話をまとめつつ、ガタリにおける物語の重要性を確認

した上で、ナラティヴ・ターンとの関係から彼の思想を位置づけてみよう。

ガタリは、個人に根差した伝統的な主体概念に違和感を覚え、主観性という独自の概念を作った。この主観性は、江口が文化という言葉で表したように、地域性、風習などを反映した、周囲の人やモノとの関係によって動的に編成されるものである。この動的編成は、その都度、集団、個人、個人未満というさまざまなレベルで主観性を実存的なまとまりにする。彼はこうした生成的主体に関する見方を、スキゾフレニーの存在論的位相を分析することで獲得した。そのため、こうした視点からの分析の試みをスキゾ分析と名づけている。そしてガタリは、さまざまな物事の関係性を反映した主観性というものを新しく作り直すことで、“社会のなかで生きづらさを抱えた人たちが、より生きやすい状態になるにはどうすればよいか”という問いに回答できると考えた。晩年、彼はこの主観性の構成要素を実存的にまとめる役割を物語の機能に見出す。そして、既存の物語モデルを相対化し、新しい物語モデルを作り直すことが、新しい主観性の生産を促す上で有効だと考えた。これを彼はメタモデル化とも呼び、スキゾ分析の方法と考えている。このように、ガタリにおいて物語とは、晩年の彼の思想において重要な役割を担い、それまでの活動が収斂していくテーマと見るができるだろう。

彼は『カオスマーズ』のなかで、この主観性と物語機能の関係の重要性を強調し、それまでの精神分析や現象学を批判する。精神分析に対しては、物語モデルを固定したことと個人に根差した主体概念に依拠してことを批判し、現象学に関しては物語モデル創造性に気づけなかったことを批判した。しかし彼の死後、これらの学問領域では、主体と物語の関係を分析するナラティヴ研究が数多く立ち上げられ、ナラティヴ・ターンという転回が訪れる。ナラティヴ・ターン以後の研究の多くは、ガタリが精神分析と現象学に対して批判した点に取り組んでおり、ガタリの思想との親和性も高まっていた。実際、こうしたナラティヴ研究の代表例ともいえるオープンダイアローグは、近年ガタリの思想やラ・ボルド病院の実践との類似が指摘されている。オープンダイアローグとガタリの思想を比較してみると、主体に関する視点の違いなどでいくつかの違いがあるものの、多くの共通点が見出された。それは例えば、統合失調症の治療モデルから出発している点や、バフチンのポリフォニー概念を取り込んでいる点などである。一言でまとめると、ポリフォニックで開かれた「物語」を作ることが、主体のあり方を立て直すのに

有効だという主張が両者に共通していると思われる。このように、「物語」という観点からガタリの思想とナラティヴ・ターン以降の研究を比較してみると、ナラティヴ・ターン以前と以後を分かつ重要な視点において、彼らの共通点がいくつも見られた。やまだがナラティヴ・ターンののはじまりを1990年代としていることを考えると、ガタリの思想は一側面においては、ナラティヴ・ターン初期の研究として位置づけられると言っても過言ではないかもしれない。

とはいえ、ガタリ自身はこうしたナラティヴ・ターンの潮流に積極的に乗っていたわけではないように見える。もちろん、彼の活動時に「ナラティヴ・ターン」という名称がなかった（少なくとも晩年ガタリの耳に入っていないであろう）ため、彼がこの潮流自体を明確に認識できなかったという点はある。しかし、もっと大きな点で、この時期（1980～90年代）のガタリが広義のエコロジー論に深く傾倒していたことが、彼を他のナラティヴ論者と一線を画したものにしていると考えられる。ガタリの場合、物語を通して言説的に表現されている主観性は、「人間」のみが持っているものだと考えない。彼は、主観性はさまざまな要素の動的編成によって形成されるが、その要素は「人間」と「それ以外のモノ」を先験的に分けた上で編成されるのではなく、そうした線引きのない状態から編成されると考える。そのため、彼の主観性が宿る範囲は「人間」以外も対象となる（おそらく、そもそも「人間」「人間以外」という線引きが明確ではないのだろう）。

ガタリのエコロジー論においては、人間精神・社会関係・自然環境という一見すると異なる三つの領域のすべてを見通せる視点でエコロジー問題に対処すべきだと言われるのだが（e.g. Guattari 1989 (=ガタリ 2008)), これは「私の内面」も「社会」も「自然環境」も、それぞれ規模は違おうとしても同根の問題に直面しているということである⁽¹⁰⁾。彼の晩年においてスキゾ分析はこの三つの領域を横断するエコロジー問題に立ち向かうわけだが、ここまでに見てきたメタモデル化＝物語の作り直しは、この問題への対応策とも考えられるわけである。つまり、物語によって「人間」の内的・主観的経験をすくいとり、人々の精神を立て直すことが目的の多くのナラティヴ研究と違い、その内的・主観的経験の背景にある周囲の人やモノとの関係、またもっと広い視点では自然環境との関係を反映したものとしての主観性という、もはや「人間」の精神を越えた、広い意味での倫理観のようなもの

を作り直すことをスキゾ分析は見据えている。彼のエコロジー論については、紙面の関係もあり本稿ではこれ以上触れることはしない。しかし、ガタリスキゾ分析や主観性という概念の持つ問題意識の広さを考えると、ガタリの思想や活動はナラティブ・ターン以後のナラティブ研究から溢れる射程を持っていそうである。しかしだからこそ、臨床の場を越えて幅広い応用可能性が見込まれているオープンダイアログなどとの違いを検討することは、ガタリの特異性を導き出す上で参照できる対比例となり得るのではないかと考えている。

また冒頭で述べた、ナラティブ・ターンが“科学的・客観的エビデンスから逃れる内的・主観的な経験を重視する動き”であるという話は、ガタリのメタモデル化という発想を踏まえて見直してみると、“科学的・客観的エビデンスという側面からのみモデル化することによって見えなくなっていた他の重要な側面からモデルを作り直してみようとする動き”と見る事ができるのではないだろうか。すなわち、ナラティブ・ターンとは、「学問の方法におけるメタモデル化」＝「“学問の語り”の作り直し」の傾向と言えるのではないだろうか。現在、多くのナラティブ研究において、「人間」精神という領域に関しては、その「“学問の語り”の作り直し」が行われてきたように思われる。しかし、ガタリエコロジー論を踏まえると、今後は社会関係や自然環境などを扱う多くの分野でも、この「“学問の語り”の作り直し」が必要だと考えられるのではないだろうか。だからこそ、ナラティブ論の幅広い応用可能性が模索される昨今、ガタリの思想を物語という観点から見直し、他のナラティブ研究と対比することの意義を問いたい。

本稿では、晩年のガタリの物語に関する分析をもとに、ナラティブ・ターンとの関係を追ってきた。といっても、今世紀に数多くのナラティブ研究が立ち上げられ、さまざまな分野におけるそれらが複雑に交錯しながら発展してきたなかで、この場で扱えたのはそのほんの一部であろう。ガタリとナラティブ研究との関係を結論づけるには、今後さらに詳細な検討が必要だと自負している。とはいえ、ガタリにおける物語の重要性を見直し、ナラティブ・ターンとの関係を足掛かりにガタリスキゾ分析を紐解く試みとして、本稿がその一助となればと願う。

注

- (1) 以下、本論文では「制度論的精神療法」とする。
- (2) 以下、本論文では「主観性」とする。
- (3) ガタリは『カオスマーズ』の最終章で、イリヤ・プリゴジンとイザベルスタンジェールが『時と永遠のあいだ』のなかで「進化を真に考えるのに「語りの要素」を物理学に導入する必要性」(Guattari 1992:183 (=ガタリ 2004:209)があると語られていることを指摘している。この指摘には、科学的真理は普遍的な参照モデルと見られることが多いが、実は物語的要素が強く含まれており、メタモデル化が可能であるという含意があるだろう。この著作はガタリが物語の重要性に気づききっかけになった可能性が高い。そのほか、ガタリが度々言及する、オーストラリアの先住民アボリジニの「ドリームタイム」という概念も、ガタリの物語理解に影響を与えていると思われる。
- (4) なお、ここでリトルネロによって生成される実在的なまとまりは「領土 (territoire)」と呼ばれる、ガタリ (およびドゥルーズ=ガタリ) の重要概念だが、本稿では領土の分析にまで踏み込まないため、本文では言及しない。
- (5) ガタリのスターン受容に関しては、拙論「ガタリとスターン——主観性はいかにつくられるか」(『フェリックス・ガタリと現代世界』所収)を参照のこと。特に物語の観点では、エピソード記憶の集積が他者を含みこんだ自己 (中核自己感) を形成するという話が重要である。また、スターンはこの論文で取り上げた『乳児の対人世界』以降の著作でさらに物語を重視する傾向になるので、この点も今後検討していきたい。
- (6) オープンダイアログに関しては、『オープンダイアログとは何か』および、このなかで斎藤が紹介しているダニエル・マックラー監督の映画『Open Dialogue』も参照させて頂いた。現在、この映画は YouTube にて閲覧可能である。(ダニエル・マックラー2014『オープンダイアログ』フィンランドにおける精神病治療への代替アプローチの (『開かれた対話』Open Dialogue, Japanese subtitles), https://m.youtube.com/watch?v=_i5GmtdHKTM (2022/9/30 アクセス))。
- (7) ガタリとバフチンの関係に関しては、立本の論文「バフチン、ガタリ——対話可能性と主体感」(『フェリックス・ガタリと現代世界』所収)に詳しい。
- (8) この点に関しては、『オープンダイアログ——思想と哲学』の松本の論でもすでに指摘されている通りである (松本 2022:114-115)。
- (9) R・A症例は、ガタリの初期の論文集である『精神分析と横断性』のはじめに登場する症例である (Guattari 1972:18-22 (=ガタリ 1994:35-42))。R・A症例に関しては、筆者の修論「フェリックス・ガタリの「リトルネロ」を巡って——臨床的意義とその展望」(2021)や、日仏哲学会 2022 年度春季大会「物語の実存化機能について——スキズの還元の観点から」などで、これまで幾度も扱ったのだが、現在でも十分に考察しきれていないという自負があるため、本稿では詳述しなかった。上記で述べた R・A 症例の分析のなかで、特筆すべき点だけを以下にまとめておく。R・A 症例は、ドゥルーズと出会う前、まだラカンに傾倒していた時期のガタリが、最初に診たスキゾフレニーであった。ガ

タリは後に『アンチ・オイディプス草稿』のなかでこの症例を振り返り、「当初ひどく重症だったこのケースは、振り返ってみるとそうではなかったし、私は報告せねばならない……[判読不可]にとって、けっして一度も分裂症ではなかったようだ。」(Guattari 2004:206 (=ガタリ 2010:203-204) と述べているため、実際には R・A がスキゾフレニーであったのかは定かではない(判読不可とされた部分が非常に重要なため、この点は今後の文献研究の課題と考えている)。しかし、「冬の時代の文学機械——R・A、ガタリ、そしてカフカ」(『フェリックス・ガタリと現代世界』所収)のなかで、松田が R・A/ガタリ/カフカという三者の類似性を指摘し、「不安と狂気のリトルネロが「R=A カフカ」の顔と結びあい、幾度となくガタリのテキストのなかで地図化されてきた」(村澤真保呂、杉村昌昭、増田靖彦、清家竜介編 2022:255) と述べていることから、ガタリの研究人生において重要な症例であったことには間違いない。また、R・A 症例は、リトルネロという言葉がはじめて使われたテキストであり (ref. Sauvagnargues 2016)、そうした意味でも意義深い。(なお、ここではリトルネロはラカンの『精神病』由来の概念として使用されている (ref. Guesdon 2019)。) ガタリは、R・A というスキゾフレニー患者の自閉的な状態を回復するのに、いくつかの実験を行う。その実験のなかでは、まずカフカの『城』の模写という物語のモチーフが登場する。そして、R・A が回復をはじめの決め手となったのは、彼が自分の日記を書くという行為だが、これはまさに“メタモデル化=物語を作り直すこと”により、リトルネロが実存的なまともを回復させた実例と見ることができるのではないかと筆者は考える。とはいえ、物語のテーマが出てくるのはガタリの晩年のテキストであるのに対し、この症例は最初期のガタリの症例報告で書かれているので、直接的に結び合わせるの難しい。また、R・A 症例自体が非常に複雑で、ガタリの後の多くの概念を想像させるモチーフが出てくるので、この症例の分析だけで一つの論文になるであろう。

- (10) ガタリのスキゾ分析とエコロジーの関係については、村澤の「反精神医学からスキゾ分析へ——統合失調症と自然環境問題のあいだ」(『統合失調症という問い——脳と心と文化』所収) に詳しい。本稿の「おわりに」の議論でも大いに参照させて頂いた。

参考文献

- 阿部 あかね 2010 「1970 年代日本における精神医療改革運動と反精神医学」『Core Ethics』 6:1-11。
- ウリ、ジャン、三脇 康夫 2005 「ジャン・ウリ講演：表現活動とラ・ボルド病院」
三脇 康雄生訳『日本芸術療法学会誌』 36 巻 1/2 号、pp. 39-45、日本芸術療法学会。
- 江口 重幸 2019 『病は物語である——文化精神医学という問い』 金剛出版。
- 古茶 大樹、糸川 昌成、村井 俊也編 2022 『統合失調症という問い——脳と心と文

化』日本評論社。

斎藤 環 2015 『オープンダイアログとは何か』医学書院。

杉村 昌昭 2001 「フェリックス・ガタリと制度論的精神療法——制度と主観性をめぐって」『現代思想 2001 年 2 月臨時増刊号 総特集＝システム』pp.163-171、青土社。

多賀 茂、三脇 康生編 2008 『医療環境を変える——「制度を使った精神療法」の実践と思想』京都大学学術出版会。

松本 卓也 2022 「精神分析とオープンダイアログ」『オープンダイアログ——思想と哲学』pp.107-118、東京大学出版会。

村澤 真保呂、杉村 昌昭、増田 靖彦、清家 竜介編 2022 『フェリックス・ガタリと現代世界』ナカニシヤ出版。

やまだ ようこ 2006 「質的心理学とナラティブ研究の基礎概念——ナラティブ・ターンと物語的自己」『心理学評論』49(3):436-463。

Dosse, François. 2007. *Gilles Deleuze et Félix Guattari: biographie croisée*. La Découverte. (=2009 『ドゥルーズとガタリ——交差的評伝』杉村 昌昭訳、河出書房新社。)

Genosko, Garry. 2009. *Félix Guattari: A Critical Introduction*. Pluto press. (=2018 『フェリックス・ガタリ——危機の世紀を予見した思想家』杉村 昌昭、松田 正貴訳、法政大学出版局。)

Guesdon, Maël. 2019. De la clinique à la musique: stéréotypies psychiatriques et ritournelles deleuzo-guattariennes. In Anne Querrien, Anne Sauvagnargues, Arnaud Villani (ed.) *Agencer les multiplicités avec Deleuze*, pp.77-91, Hermann Éditeurs.

Guattari, Félix. 1972. *Rsychanalyse et transversalité : Essais d'analyse institutionnelle*. La Decouverte. (=1994 『精神分析と横断性——制度分析の試み』杉村 昌昭、毬藻充訳、法政大学出版局。)

Guattari, Félix. 1989. *Les trois écologies*. Galilée. (=2008 『三つのエコロジー』杉村 昌昭訳、平凡社。)

Guattari, Félix. 1992. *Chaosmose*. Galilée. (=2004 『カオスモーズ』宮林 寛、小沢 秋広訳、河出書房新社。)

Guattari, Félix. 1996. *Institutional Practice and Politics*, Translated by Lang Baker. In Gary Genosko (ed.) *Guattari Reader*, pp.121-138, Blackwell Publishers. (=2000 『精神の管理社会をどう超えるか?——制度論的精神療法の現場から』pp.23-54、松籟社。)

Guattari, Félix, 2004. *Écrits pour l'anti-Œdipe*. Stéphane Nadaud (ed.) *Ligne*. (=2010 『アンチ・オイディプス草稿』國分 功一朗、千葉 雅也訳、みすず書房。)

Guattari, Félix. 2013. *Qu'est ce que l'écophilosophie?*. Lignes-IMEC. (=2015 『エコゾフィーとは何か——ガタリが遺したもの』杉村 昌昭訳、青土社。)

Sauvagnargues, Anne. 2016. *ARTMACHINES : Deleuze, Guattari, Simondon*. Edinburgh University Press.